

入嚴閣備箭祭餅、被申子細之間、將軍家出御于西侍之上、上總介伊豆守以下數輩列候、先供十字、蔣軍家召小山左衛門尉朝政、一口朝政賜、蹲居御前三度食之、初口發叫聲、第二三度不然、○下

〔南浦文集下〕三月十一日、天氣新吹日本晴、聞宿直宗圓擔肩重、作俳諧以寄之、○中

略

多歲昇山又幾回、祭儀大餅八千枚、神之受與人之潤、悉自檀那祈念來、祭祀之日贈昇山人

〔嬉遊笑覽十上〕花びら、山家集にみやたてと申けるはしたもの、としたかくなりて、さまかへなどして、ゆかりにつきて吉野に住侍りけり、おもひがけぬやうなれども、供養をのべんれうにとて、くだものを高野の御山へつかはしたりけるに、花と申くだもの侍けるを見て、申つかはしける、をりびつに花のくだものつみてけり、よしのゝ人のみやたてにしてと有くだもの、圓扁にして花瓣に似たるなり、吉野にて春の頃、花餅とも御福ともいひて賣ものは、竹串を半迄團扇の骨のごとく細く裂たるに、小き花びら餅をさしたるなり、江戸にて近ごろ諸佛の縁日にばしに出て賣ものあり是なり、下にいふべし、これはもと吉野に華供といふ事あり、又歳首に藏王權現に備へたる餅を碎き、他の米を加へ、二月一日、本堂にて諸人に施し、又山中の僧俗に普く賦る是を餅配といふ、委しく滑稽雜談に出たり、山家集に花のくだものと云るは是なり、洛陽集唐餅くぱりおくれじ吉野山、友吉野山去年のしんこや餅配、自惚もろこしの吉野といふ枕詞をあやなして、もろこし餅にいひかけたり、○中花びらと云るもの外にも有り、御傘に花びら、僧衆の紙にてまろくして、行道の時ちらさるゝを云、是は散花をいへり、又正月の餅に菱花びらとて有と云り、是今いふ菱餅なり、五節句に云、餅を押たるなり、菱にきる云々、但し昔は小さく作りしものとみゆ、似せ物語にひえたる餅花びらになりにけりとも有、こは餅花にや、畿内の俗、正月の餅花を、涅槃會に煎て供物とし、蓬の餌を作りて備ふるを、いづれも名付てはなくそといふは、疑らくは花供の誤なるべしといへり、洛陽集、涅槃鼻屎や濟度方便一つかみ、静鬼貫が獨言に餅つきは云々、幼き人の柳が枝に、餅むしり付て花とみるよ云々、松